

3月12日に行われた「天理スポーツシンポジウム2011 未来を創る! ~天理 障害者スポーツ~」の報告第4回目は、筆者が行った基調講演の最終回である。

頸髄損傷者が行っている車椅子ツインバスケットボール(以下、ツインバスケットボール)では、年齢や男女といった区別はしていない。区分け(クラス分け)をしているのは、障害の重度さによることだけで、男女ともに同じチームでゲームを楽しんでいる。一般的にはツインバスケットボールより車椅子バスケットボールのほうが知られているだろう。車椅子バスケットボールも、障害を持って車椅子に乗っている人だけがするスポーツではなく、車椅子に健常者が乗ってバスケットをすれば、一緒に車椅子バスケットを楽しむことができるのである。「これは障害者のスポーツだ」、また「これは健常者のスポーツだ」などと分けてするのではなく、一緒に同じものを使ってすれば共に楽しむことができる。例えば、車椅子バスケットボールには健常者のチームがあり、障害者のチームと試合をして、障害者も健常者も混ざってゲームを楽しんでいる。彼らは「車椅子という道具を使えば、健常者も障害者も同じ目線になれる。物理的にもだし、気持ちの部分でもね」と話している。

このように特に健常、障害を分ける必要はなく、工夫をすることで色々なスポーツと一緒にできるのである。

ツインバスケットボールは日本で生まれたスポーツである。国際交流大会も行われるようになってきたが、矢部京之介氏は、パラリンピック種目にもなっている頸髄損傷者が行うウィルチェアラグビー(車椅子ラグビー)に追いつけるよう、奔走されている。実際のウィルチェアラグビーは、これが障害を持っている人がしているのかと思わされるほど鋭いタックルがある。転倒したり、時には飛ばされたりと激しいプレーを楽しむ障害者もたくさんいる。

では、パラリンピックの実施競技種目であるが、現在は夏季競技20競技、冬季競技5競技である。これを表1に示した。

講演の最後は障害者スポーツの実践についてである。スライド1に示したのは茨城県の霞ヶ浦湖畔を発着として行われている、「かすみがうらマラソン大会」の様子である。この大会は国際パラリンピック委員会公認コースであり、「国際盲人マラソンかすみがうら大会」も兼ねている。筆者もランナーとして

参加したことがあるが、毎年、多くの盲人ランナーが参加している。左が盲人ランナーで、右がガイド(伴走者)である。矢印で示した部



スライド1

分にガイドとランナーをつなぐ一本のロープがある。ガイドは言葉かけとともに、このロープを使ってランナーに走る方向などを伝える。もちろん、引っ張ったり、押ししたりして前進を助けることはできない。この一本のロープは障害のある人となない人とのバリアを取り除く手段となり、二人をつないでいる。まさに、インクルージョン実践の絆と言える。障害者スポーツでは、障害のある人、ない人が一緒にジョイントしていく必要があり、一本のロープのように手を差しのべていく。そのために、まずは健常者の目線を下げること。障害という言葉を使うと、健常者は障害者との間に壁を作りがちである。だから障害者スポーツという言葉ではなく、アダプテッド・スポーツという言葉を使うことで同じ目線で一緒にスポーツを楽しんでいくことができる。アダプテッド・スポーツという言葉はまだ知られていない。この言葉や意義が世界に広く知られ、多くの人々が障害を持つ人たちとともにスポーツを楽しむことができるよう、矢部氏を筆頭に筆者らアダプテッド・スポーツの研究者たちは様々な活動を行っている。

日本では、障害者スポーツという言葉の方が認知されているのが現状である。障害者を取り巻くスポーツ環境は他国と比較して遅れている。日本で障害者スポーツを管轄しているのは厚生労働省である。障害者スポーツで活躍している選手が新聞等で記事になるのはスポーツ欄ではなく一般の欄に掲載されることが多い。障害者がスポーツをするのはスポーツという感覚ではなく、リハビリや福祉といった感覚である。以前、国会の中でスポーツ省(庁)をつくらうという動きがあった。アダプテッド・スポーツ関係者はこのスポーツ省(庁)設置を心待ちにしている。海外ではフランスなど国家の中にスポーツ省(庁)や委員会等が機能している国が数多くある。スポーツ省の中では、健常者、子供、高齢者、男女、障害者等、どの分野のスポーツであっても同じ「スポーツ」という枠の中で一括りにして扱っている。オーストラリアでは障害者が行っているスポーツと健常者が行っているスポーツの間に壁がない。どちらも「スポーツ」という対象で見ているからである。日本でもスポーツ省(庁)を作ることで、障害のある人もない人も「スポーツ」という同じ枠の中で、一緒にスポーツを楽しめるのではないかと期待している。

パラリンピック実施競技種目

夏季競技(20競技、ローマ1960~)

陸上競技	水泳	車いすテニス
ボッチャ	卓球	視覚障害者5人制サッカー
セーリング	パワーリフティング	脳性麻痺者7人制サッカー
自転車	アーチェリー	車椅子バスケットボール
ゴールボール	車いすフェンシング	ウィルチェアラグビー
射撃	馬術	シッティングバレーボール
柔道	ボート	

冬季競技(5競技、エンシェルトツヴィーク1976~)

アルペンスキー	クロスカントリースキー	アイススレッジホッケー
バイアスロン	車いすカーリング	

表1